

わが母

老 舎

(訳 富永涓子)

母の実家は北平（北京）徳勝門外、城壁辺りの大鐘寺へ行く大通りの小さな村にあった。村には全部で四、五軒の家があり、姓はみな馬。みんなほほど肥沃な土地を耕していた。しかし、私と同世代の若者達は、ある者は兵隊になり、又大工や、左官、警備員などをしていた。彼らは農家だが、牛馬を養えず、人手が足りない時には女性たちも土地の仕事をしなければならなかった。

祖母の家について、私の知っているのはただこれだけで、母の祖母がどんな様子だったかはみんな早く亡くなったので知らない。さらに遠い祖先と家系についてはもう全く分からない。貧しい者はただ、目の前の衣食のことにかまってるだけで、昔の輝きがどんなものかを話す時間などなかった。「家系図」、この字句は、私の幼年時代にはもともと聞いたことはなかった。

母は農家の生まれなので、勤勉で、誠実、身体も健康だった。このことは今の私におそらく大きな影響を及ぼしていると思われる。

母は多分とても早く嫁いだようだ。私の一番上の姉はもう六十過ぎのおばあさんで、しかも姪は私より一歳年上である。私には三人の兄と、四人の姉がいたが、成人したのはただ一番上の姉、二番目の姉、三番目の姉、三番目の兄と私である。私は一番末の子だ。わたしが生まれた時、母はずでに四十一歳で、上と次の姉はもう嫁に出ていた。

私が生まれる前、二人の姉が嫁入りした頃の我が家は、どうにかやっっていけるまですまじいようだったと思われる。あの頃の縁組は双方の家柄、身分がつり合っているかをよく調べて決めたもので、上の姉の夫は小官吏で、二番目の姉の夫も酒館を開き、彼らはかなり体面を保っていた。

しかし、わたしは、なんと家庭に不幸をもたらしたのだ。わたしが生まれ出ると、母は夜中じゅう気を失い、やっと眼を開けてわが子を見た。なんとまあ、有難いことに一番上の姉がわたしを懐に抱えていて、凍死をしないですんだのだった。一歳半の時、私は父を死に追いやってしまった¹。

兄は十歳足らず、三姉は十二、三歳、私はやっと一歳半、全て母一人の力によって養われたのだった。寡婦である父の姉と私たちは一緒に住んだ。彼女は阿片を吸い、紙牌²占いをし、癩癩持ちだった。私たちを養うため、母は近所の人たちの衣服を洗濯し、繕い、作らねばならなかった。私の記憶の中での母の手は一年中赤く腫れていた。昼間は、盥^{たらい}一、二杯の衣服を洗った。母は、たとえ食肉処理業者が持ちこんだ鉄色のように黒く汚れた靴下であっても、雪のようにきれいに洗っていたように、いい加減にごまかすようなことは少しもせず、仕事をし続けていた。夜になると、三姉とカンテラを囲み、夜中までずっと衣服の繕いをした。母は年中休むことはなかったが、忙しい中でも家の中はきちんと清潔に片付けていた。机や椅子はみな古く、戸棚の銅製の金具はすでに欠けていて不揃いだったが、壊れた机の上にはいつも埃ひとつなく、ぼろぼろの金具も彼女の手でぴかぴかに磨かれていた。父が遺した庭の柘榴^{のこざくろ}と夾竹桃^{きょうちくとう}のいくつかの鉢には大切に水をやり、護り、毎年夏にはたくさんの花が咲いた。

兄はほとんど私とは遊ばなかった。彼は、時には学校へ行き、ある時は丁稚奉公^{でっち}に行き、落花生や、桜桃などの小物を売りに行く時もあった。母は涙ぐんで彼を送り出し、二日にもならないのに涙ぐんで彼の帰りを迎えた。私はこれらすべてがどんな事なのか分からず、彼には親しみを覚えなかった。母と頼りあって生きていたのは、私と三姉だった。私は母達が仕事をする時には、いつも後ろについてまわり、彼女達が花に水をやる時には、私も水を汲んで用意し、掃除の時には土をかき集めたりしていた。このことから、花を愛^めでること、きれい好きであること、秩序を守ることを学んだ。これらの習慣はやはり今に至るまで保たれている。

母は、客人が来ると、勿論どんなに貧しい中でも、手抜きをすることなくもてなした。叔父や従兄たちは度々自分たちで酒、肴を買い、母は恥ずかしくて顔を赤らめたりしたが、懇ろ^{ねんご}に酒を温め、麵を作り、それは彼女のひとつの喜びでもあった。親戚や友達の家で冠婚葬祭があると、母は必ずきれいに洗ったちゃんとした服装で、自分から、ほんの僅かながらもお祝い、お悔やみを持って出向いた。今に至ってみても、生活がたとえ苦しくてもわたしが客好きなところは全く変わらず、幼い頃から見慣れたことは容易には変わらないものである。

父の姉はいつも癩癩をおこし、ただあら捜しをしていた。彼女は我が家の閻魔^{えんま}であった。私が中学に入ってやっと死んだ。私は母が彼女に反抗したのを見たことがなかった。「姑のいじめを受けなかったので、小姑から受けるぐらいは当たり前でしょ。これも運命！」母は、説明しなければ他の人が納得しないような時には、このように話していた。そうだ、これは運命なのだ。

母は最期まで働き、貧しく、苦勞したまま老いたが、全て運命のあるがままを受け入れていた。損をすることばかりだったが、友達や隣人を進んで積極的に助けた。産まれた子の産湯をつかわせることができ（貧しい友達たちはこれで僅かな払いを節約できた）、急性の胃腸カタルの手当てができ、子供たちの散髪、娘たちの化粧などなど、求めに応じて、およそできることは何でもした。しかし、喧嘩など争いごとは、一切なかった。彼女はいつも損をしていたが、文句を言うことはなかった。小姑が死んだ時、母は三十年来のすべての不満をはき出しているかのように、ずっと墓地で泣いていた。どこから来たのか一人の甥が相続権を主張したが、母は一言も言わずに、彼に古い机とボロボロの腰掛けなどを持って行かせ、しかも小姑が飼っていた一羽の太った鶏も与えた。

しかし、母は決してか弱くはなかった。父はあの「義和団事件」の年に死んだ。連合軍が入城し、つぎつぎと家々の財物家禽を捜し取り、われわ

れの家も二回^{さが}捜された。母は兄と姉を引っ張って塀の下に坐らせ“鬼子”〔敵の兵士〕が玄関を開けて入ってくるのを待っていた。“鬼子”は門に入り、銃剣で老いた犬を刺し殺し、その後部屋に入って捜索をした。彼らが行ってしまってから、母はボロボロの衣装箱を動かし、やっと私を見つけた。もし箱が空でなければ、私はとっくに押しつぶされて死んでしまっていたことだろう。

皇帝は去り、夫は死に、“鬼子”が来て、街中は血と炎の海と化した。しかし母は怖れることなく、銃剣のもと、飢餓の中にあっても、子供たちを護ろうとした。北平は数えられないほど動乱があり、ある時は軍事クーデターで街中まるごと燃やされ、火の玉が私たちの庭にも落ちた。又ある時は内戦が起こり、街の門はぴたっと閉められ、商店も閉じ、昼夜大砲が響いた。この恐怖、この緊張、その上さらに食べ物のことを考え、子供たちの安全に気を配る、いかにして一人のか弱い寡婦が耐えることが出来るだろうか。しかし、このような時、母は度胸を決め、慌てず泣くこともなく、方法がなくなっても何とか見つけ出した。彼女の涙は心の内に向けて落ちていたのだ！

この柔らかさと硬さを備えもった性格は、私にも受け継がれた。私はすべての対人関係においては平和的な態度を取り、ばかを見ることもある。だが、人間として、私は一定した考えと基本的な法則を持っている。どんなことも我慢するが、自分の決めた限界を超えることはできない。私は人見知りをし、面倒なことをおそれ、表立つことをおそれる。しかし私が行かねばならない時には敢えて実行する。ちょうど母がしていたように。

私塾から小学校へ、中学校へと上がるあいだに、少なくとも何十人かの教師と出会った。その中で私が大きな影響を受けた人、または少しも影響を受けなかった人もいるが、私の真の教師で、性格、気性を伝えてくれたのは私の母である。母はまったく字を知らなかったが、私に生命の教育を与えてくれた。

私が小学校を卒業する時、親戚や知人は揃って、母を助けられるように、私に技術を学びに行かせるようにと勧めていた。私も食べられる道を探し、母の苦勞を減らすべきだとわかっていたが、進学をしたかった。私は密かに師範学校を受けた。師範学校は制服、食事、本、宿舎、すべて学校が提供した。このようであればと、私はやっと思いついて母に進学のことを話した。入学には、十元の保証金を払う必要があった。これは大金だ！母は半月をかけ苦勞してこの大金を集め、その後涙ぐんで私を送り出してくれた。彼女はただ子供の前途のためには、苦勞をいとわなかったのだ。私は師範学校を卒業し、小学校の校長に任命され、その時、母と私は一睡もしないで夜を明かした。私はただ一言「これからは、もう休んでいて下さいよ！」と言い、彼女の返事はただ一筋の涙であった。

私が入学した後、三姉が結婚した。母は子供に対しては同じように可愛がったが、もし少しでも多く愛したのは誰かといえば、それは当然三姉であっただろう。というのは、父の死後、家中の全ての事は母と三姉が共同で何とか維持していたからだ。三姉は母の右腕であったが、その右腕を断ち切らなくてはならないことを知っていたし、また自分の都合のために娘の青春を無駄にすることはできなかったのだ。飾りのついた婚礼用の輿が我が家のボロボロの門に来た時、母の手は氷のように冷たく、顔色は血の気が無かった。ああ、あの陰曆の四月、とても暖かい天気の日。みんなは彼女が眩暈めまいを起こさないかと恐れたが、彼女は何とか必死になって、唇を噛みしめ、戸の枠で手を支え、輿がゆっくりと去っていくのを見ていた。

間もなく、父の姉が死んだ。三姉はすでに嫁に行き、兄も不在、わたしも学校へ戻り、家の中にはただ母一人が残った。彼女は朝から晩まで仕事をしなければならず、一日中誰とも一言も話さなかった。新年が来て、政府の陽曆を用いる提唱がちょうど間に合い、旧曆での年越しは許されなくなった。大晦日、私は二時間の暇をもらい、我慢できないような混雑の街から、竈かまどに火の気の無いような貧乏暮らしの家に帰った。母は微笑んだ。

私がすぐ学校へ戻らねばならないのを聞いて母は呆然とし、ややあって、やっと一息ため息をもらした。もう帰らねばならない時間になると、彼女は一握りの落花生を私に手渡して言った、「さあ行きなさい、坊や!」と。

街は非常に賑やかだったが、私には何も見えなかった。涙が私の目を塞いだのだ。今、あの大晦日の当日、孤独に過ごしていた痛ましい慈母を思い出すとまた、眼は涙で遮られるのだ。しかし、その慈母を再び見ることはもうできない、彼女はすでに土の中に入ってしまったのだ。

子供たちの生き方は父母が敷きつくした軌道に従うことはなく、どんどんと真直ぐ前へ進んで行き、老人はいつも悲しみを抱いて取り残されてしまう。

私が二十三歳の時、母は結婚を薦めたが、私は断った。私は三姉に、私のために母を説得してくれるようにと頼み、年老いた母は涙をためて頷いた。私は母を愛していたのに、彼女に大きな打撃を与えた。また、時代が私を親不孝の息子にさせたのか。私は二十七歳で英国へ行った。自分自身のために、六十を過ぎた母に第二の打撃を与えたのだ。彼女の七十の長寿を祝う日、私はまだ遠い異国の地にいたが、その日、老母はお祝いの酒を二口ほど飲んで早めに眠りについた。彼女は末っ子のことを想っていたが、口に出すことは無かったと、後になって姉たちは私に告げた。

七月七日、盧溝橋事件の後、私は南から逃げて来た。北平はまた義和団のあの年のように“鬼子”に占領されていた。しかし、母は日夜、末っ子がこちらへ逃げてくるのを心配していた。母がどんなに心配していたか、私は想像することができたが、帰れなかった。家からの手紙を受け取るたびに、どんなよくない知らせがあるかもしれないと恐れ、恐れ、ほんとうに恐れて、すぐ開けて見られなかった。

人は、たとえ八、九十歳になっても、母親がいれば子供のような気持ちでいられるものだ。母を失うことはちょうど、花瓶に挿されている花の、色や香りがあっても根を失くしてしまっているようなもので、母親のいる

人は心が安定しているものだ。私はすでに根無し草になってしまったと告げる悪い知らせの手紙が来るのが怖かった、怖くて怖くて仕方がなかった。

去年一年、私は家からの手紙の中に、母の生活の様子に関する事柄が見出せなかった。何かあったのではないかと気懸かりだった。ひよっとすると、家の者が故郷を離れて一人苦勞している私に知らせたくないことがあるのではないかと予想した。

母の誕生日は九月で、私は八月半ばに中秋節をかねて長寿の祝いに間に合うように手紙を送った。手紙には、私が心配しなくてもよいように、くれぐれもお祝いの様子をくわしく知らせてほしいと書いた。十二月二十六日、軍人を慰勞する文化人の大会から帰って、家からの手紙を受け取った。私はなぜかすぐ読もうとはしなかった。寝る前に手紙の封を切った。母はすでに、一年前にこの世を去っていたのだ！

この命は母がくれたものだ。私が成人となれたのは、母が心血を注ぎ込んでくれた賜物である。私がまともな人間になれたのは、母からの影響を受けたからである。私の性格、習慣すべて母から受け継いだのだ。彼女は一生一日たりとも幸せではなく、死ぬまで粗食で過ごしたのだった。

ああ！なんと云えばよいのか？ 心が痛む！ 心が痛む！

1 「私は父を死に追いやってしまった。」……原文は、“我把父克死了。”

“克死”とは、運の強い者が弱い者を死に追いやるという迷信。

2 紙牌……カルタの一種で勝負ごとに使う。

.....
老舍（1899-1966）：北京出身。小説家、劇作家。廬溝橋事件以後、抗日を題材に多くの作品を発表した。文革時、紅衛兵に攻撃され入水自殺した。本訳に使用したテキスト：『現代中国著名作家散文選』，東京，白帝社，2004，pp. 75-85.



母亲的娘家是在北平德胜门外，土城儿外边，通大钟寺的大路上的一个小村里。村里一共有四五家人家，都姓马。大家都种点不十分肥美的地。但是与我同辈的兄弟们，也有当兵的，作木匠的，作泥水匠的，和当巡查的。他们虽然是农家，却养不起牛马，人手不够的时候，妇女便也需下地作活。对于姥姥家，我只知道上述的一点。外公外婆是什么样子，我就知道了，因为他们早已去世。至于更远的族系与家史，就更不晓得了。穷人只能顾眼前的衣食，没有功夫谈论什么过去的光荣。“家谱”这字眼，我在幼年就根本没有听说过。

母亲生在农家，所以勤俭诚实，身体也好。这一点事实却极重要，因为假若我没有这样的一位母亲，我之为我恐怕也就要大大的打个折扣了。母亲出嫁大概是很早，因为我的大姐现在已是六十多岁的老太婆，而我的大甥女还长我一岁啊。我有三个哥哥，四个姐姐，但是长大成人的，只有大姐，二姐，三姐，三哥与我。我是“老”儿子。生我的时候，母亲已有四十一岁，大姐二姐已都出了阁。

由大姐与二姐所嫁人的家庭来推断，在我生下之前，我的家里，大概还马马虎虎的过得去。那时候订婚讲究门当户对，而大姐丈是作小官的，二姐丈也开过一间酒馆，他们都是相当体面的人。

可是，我，我给家庭带来了不幸。我生下来，母亲晕过去半夜，才睁眼看见她的老儿子——感谢大姐，把我揣在怀中，致未冻死。

一岁半，我把父亲“克”死了。

兄不到十岁，三姐十二、三岁，我才一岁半，全仗母亲独力抚养了。父亲的寡姐跟我们一块儿住。她吸鸦片，她喜摸纸牌，她的脾气极坏。为我们的衣食，母亲要给人家洗衣服，缝补或裁缝衣裳。在我的记忆中，她的手终年是鲜红微肿的。白天，她洗衣服，洗一两大绿

瓦盆。她作事永远丝毫不敷衍，就是屠户们送来的黑如铁的布袜，她也给洗得雪白。晚间，她与三姐抱着一盏油灯，还要缝补衣服，一直到半夜。她终年没有休息，可是在忙碌中她还把院子屋中收拾得清清爽爽。桌椅都是旧的。柜门的铜活已残缺不全，可是她的手老使破桌面上没有尘土，残破的铜活发着光。院中，父亲遗留下的几盆石榴与夹竹桃，永远会得到应有的浇灌与爱护，年年夏天开许多花。

哥哥似乎没有同我玩耍过。有时候，他去读书，有时候，他去学徒，有时候，他也去卖花生或樱桃之类的小东西。母亲含着泪把他送走，不到两天，又含着泪接他回来。我不明白这都是什么事，而只觉得与他很生疏。与母亲相依为命的是我与三姐。因此，他们作事，我老在后面跟着。她们浇花，我也张罗着取水，她们扫地，我就撮土……从这里，我学得了爱花，爱清洁，守秩序。这些习惯至今还被我保存着。

有客人来，无论手中怎么窘母亲也要设法弄一点东西去款待。舅父与表哥们往往是自己掏钱买酒肉食，这使她脸上羞得绯红，可是殷勤的给他们温酒作面，又给她一些喜悦。遇上亲友家中有喜丧事，母亲必把大褂洗得干干净净，亲自去贺吊份礼也许只是两吊小钱。到如今，我的好客的习性，还未全改，尽管生活是这么清苦，因为自幼儿看惯了的事情是不易改掉的。

姑母时常闹脾气。她单在鸡蛋里找骨头。她是我家中的阎王。直到我入了中学，她才死去。我可是没有看见母亲反抗过。“没受过婆婆的气，还不受大姑子的吗？命当如此！”母亲在非解释一下不足以平服别人的时候，才这样说。是的，命当如此。母亲活到老，穷到老，辛苦到老，全是命当如此。她最会吃亏。给亲友邻居帮忙，她总跑在前面。她会给婴儿洗三（穷朋友们可以少花一笔“请姥姥”钱），她会刮痧，她会给孩子们剃头，她会给少妇们绞脸……凡是她能作的，都有求必应。但是，吵嘴打架，永远没有她。她常吃亏，不逗气。当

姑母死去的时候，母亲似乎把一世的委屈都哭了出来，一直哭到坟地。不知道哪里来的一位侄子，声称有承继权，母亲便一声不响，教他搬走那些破桌子烂板凳，而且把姑母一只肥母鸡也送给他。

可是，母亲并不软弱。父亲死在“庚子闹拳”的那一年。联军入城，挨家搜索财物鸡鸭，我们被搜两次。母亲拉着哥哥与三姐坐在墙根，等着“鬼子”进来，街门是开着的。“鬼子”进门，一刺刀先把老黄狗刺死，而后入室搜索。他们走后，母亲把破衣箱搬起，才发现了我。假若箱子不空，我早就被压死了。

皇上跑了，丈夫死了，鬼子来了，满城是血光火焰，可是母亲不怕，她要在刺刀下，饥荒中，保护着儿女。北平有多少变乱啊。有时候兵变了，街市整条的烧起，火团落在我们院中。有时候内战了，城门紧闭，铺店关门，昼夜响着枪炮。这惊恐，这紧张，再加上一家饮食的筹划，儿女安全的顾虑，岂是一个软弱的老寡妇所能受得起的？可是，在这种时候，母亲的心横起来，她不慌不哭，要从无办法中想出办法来。她的泪会往心中落！

这点软而硬的性格，也传给我了。我对一切人与事，都取和平的态度，把吃亏看作当然的。但是，在作人上，我有一定的宗旨与基本的法则，什么事都可将就，而不能超过自己画好的界限。我怕见生人，怕办杂事，怕出头露面。但是到了非我去不可的时候，我便不敢不去，正像我的母亲。

从私塾到小学，到中学，我经历过起码有几十位教师吧，其中有给我很大影响的，也有毫无影响的，但是我的真正的教师，把性格传给我的，是我的母亲。母亲并不识字，她给我的是生命的教育。

当我在小学毕了业的时候，亲友一致的愿意我去学手艺，好帮助母亲。我晓得我应当去找饭吃，以减轻母亲的劳动困苦。可是，我也愿意升学。我偷偷的考入了师范学校制服，饭食，书籍，宿处，都由学校供给。只有这样，我才敢对母亲说升学的话。入学，要交十元的

保证金。这是一笔巨款！母亲作了半个月的难，把这巨款筹到，而后含泪把我送出门去。她不辞劳苦，只要儿子有出息。当我由师范毕业，而被派为小学校校长，母亲与我都一夜不曾合眼。我只说了句：“以后，您可以歇一歇了！”她的回答只有一串串的眼泪。

我入学之后，三姐结了婚。母亲对儿女是都一样疼爱的，但是假若她也有点偏爱的话，她应当偏爱三姐，因为自父亲死后，家中一切的事情都是母亲和三姐共同撑持的。三姐是母亲的右手，但是母亲知道这右手必须割去，她不能为自己的便利而耽误了女儿的青春。当花轿来到我们的破门外的时候，母亲的手就和冰一样的凉，脸上没有血色——那是阴历四月，天气很暖。大家都怕她晕过去。可是，她挣扎着，咬着嘴唇，手扶着门框，看花轿徐徐地走去。

不久，姑母死了。三姐已出嫁，哥哥不在家，我又住学校，家中只剩母亲自己。她还须自晓至晚的操作，可是终日没人和她说一句话。新年到了，正赶上政府倡用阳历，不许过旧年。除夕，我请了两小时的假。由拥挤不堪的街市回到清锅冰灶的家中。母亲笑了。及至听说我还须回校，她愣住了。半天，她才叹出一口气来。到我该走的时候，她递给我一些花生，“去吧，小子！”

街上是那么热闹，我却什么也没看见，泪遮迷了我的眼。今天，泪又遮住了我的眼，又想起当日孤独过那凄惨的除夕的慈母。可是，慈母不会再候盼着我了，她已入了土！

儿女的生命是不依顺着父母所设下的轨道一直前进的，所以老人总免不了伤心。

我廿三岁，母亲要我结婚，我不要。我请来三姐给我说情，老母含泪点了头。我爱母亲，但是我给了她最大的打击。时代使我成为逆子。廿七岁，我上了英国。为了自己，我给六十多岁的老母以第二次打击。在她七十大寿的那一天，我还远在异域。那天，据姐姐们后来告诉我，老太太只喝了两口酒，很早的便睡下。她想念她的幼子，而

不便说出来。

七七抗战后，我由济南逃出来。北平又像庚子那年似的被鬼子占据了，可是母亲日夜惦记的幼子却跑到西南来。母亲怎样想念我，我可以想象得到，可是我不能回去。每逢接到家信，我总不敢马上拆看，我怕，怕，怕，怕有那不祥的消息。人，即使活到八九十岁，有母亲便可以多少还有点孩子气。失了慈母便像花插在瓶子里，虽然还有色有香，却失去了根。

有母亲的人，心里是安定的。我怕，怕，怕家信中带来不好的消息，告诉我已是失去了根的花草。

去年一年，我在家信中找不到关于老母的起居情况。我疑虑，害怕。我想象得到，或有不幸，家中念我流亡孤苦，或不忍相告。

母亲的生日是在九月，我在八月半写去祝寿的信，算计着会在寿日之前到达。信中嘱咐千万把寿日的详情写来，使我不再疑虑。十二月二十六日，由文化劳军的大会上回来，我接到家信。我不敢拆读。就寝前，我拆开信，母亲已去世一年了！

生命是母亲给我的。我之能长大成人，是母亲的血汗灌养的。我之能成为一个不十分坏的人，是母亲感化的。我的性格，习惯，是母亲传给我的。

她一世未曾享过一天福，临死还吃的是粗粮。唉！还说什么呢？心痛！心痛！

.....